

---

# 千年乃戀

ジスレーヌ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

千年乃戀

### 【Nコード】

N5067Z

### 【作者名】

ジスレーヌ

### 【あらすじ】

放たれる想い、全ては心次第。

## 千年乃戀

今日も晴天の雲ひとつ無い空の下でまた、ひとつ、ひとつと罪と罰が犯されていった。

店先で盗みを働き食べ物を翳ませては逃げ惑い、追いつけ回される子供。

裏路地では無慈悲な暴力を振るい金品を奪い悦に浸る者。奪った金で博打に勤しむ者や、勝った者から金を巻き上げる強者…。

強い者に媚び諂い、弱い者には際限のない暴力を浴びせる縦社会。華の都、天下の江戸と謳われているのは表の顔で、裏では無法地帯だった。

しかし、これは悲しきかな江戸の町では日常茶飯事。

己が今日を明日を生きるために行う正当防衛。

たとえそれが『罪』と呼ばれるものであっても…しなくては自分達に今を生きる術がない。闇に墮ち墮とされた者はもはや、真つ当に生きるだけの気力は無く浴びせる罵倒に暴力、弱肉強食の世界であり無法地帯でもあった…。

それでも、命があればそれは幸運…、たとえ其れが虫の息であるうとも…。

だがそれは男達の運命の場合、女達の待遇は裏世界では優遇されている。…無論、男達の慰み者や奴隷女…用途は様々だが、大抵の場合慰み者として、もしくは一時の金の為に女は遊郭に売られるのが世の常。女達は事情は各々在れどみな『売られた』事実と同じ。

そこにいる限り男を悦ばす為の教育を受け、男を持って離す為の作法を受け強制的に身に付けさせられる。

全ては男、おとこ、オトコのため…。

男がいなくては価値の無い、慰み人形…。

おとこがいなければ見向きもされない、壊れた玩具…。

オトコがいなくては人して女として生きれない、不完全な生き物…。

そんな遊郭に堕ちた私達女はいつになったら真つ当に生きられるのだろう…？いつになったら日の光をその身に受け、表通りを歩けるのか…？

それは、きっと、神も仏もわからない運命のような気がする…。

明日も明後日も、この先ずっと変わらないであろうこの空の青さを見上げ私は静かに祈った。

『来世も変わることのないこの青空の下で、今度こそ平和に生きていけますように…』

「…また、考え事かい？」

窓の鉄格子から見える空を見上げては、思いを馳せる。

私の傍で柔らかな笑みを浮かべる男性、銀様。何をする風でもなく私を囲い抱くことも無く、奉仕を強要することも無く、ただ私の様子を見て楽しんでいるかのように笑顔を向けるだけだった…。それはまるで恋人の睦み会いの様に接する様で、私には少しこそばゆくてはがゆくて。

…幸せな時間…。

この人の考えている事がわからない…。何故私を買い続けているのかすらも…。

「…自分の存在意義について考えていたわ」

「また難しいことを考えるね」

「抱かれることの無い私の価値はいったい何なのでしょう？」

何度と無く口にしたこと。その台詞を聞く度に銀様は辛く寂しうに表情を落とす。

「…桜…」

「遊郭での女の価値は決まっています、それを真つ当できぬ私は朽ちた人形も同じこと」

遊郭に住まう女の価値は、男に抱かれる事のみ。

太夫の地位は別格であり、遊郭の中で唯一その身に男を受け入れなくても許される存在であり、男と同じだけの教養を身につけている、束縛と自由とが共存する不思議な女性…。太夫を困う事が出来るのは裕福な商人でも難しく、一般的な男性は自分のような身分…振袖新造に身を置く商売女をどれほど困えるかが価値観になる。

振袖新造になる前に、私は銀様に買われた。

通例でそれはありえないことで、振袖新造にすらなっていない遊郭の女は男の相手はおるか接することもない。女は必ず番頭新造を通し女を指名する流れが遊郭での決り事であり、それを飛ばした私はきつと異例の事なんだと思う。

不意に私は肌のぬくもりを感じる。唯一銀様が私にしてくる行為に少しの安堵を感じ身を任せる。

不思議なくらいに安心できるこの温もり。

何故安心できるのかもわからないけど私はこの温もりが一番き…。

「…まだ思い出せないんだね。」

私としてはそれが寂しいところだが、君が…桜が今生のこの世で生きて

どんな形でも巡り会えた事に、居もしない神に感謝しなくてはならないんだろうね」

そういって、交差する腕に力を入れる。

まるで、『露と消えてしまわないかのように』私という存在を繋ぎ止めておく鎖のように。

…何故？そんな風に大切に扱ってくれるのだろうか？

「私は生まれも育ちも遊郭です」

「…わかつているよ」

私は青い悠久なる空を見上げて

「…鳥のように自由になりたい…」

言葉にするはずもなかった言葉が漏れてしまう。

「…でも」

背中から感じるぬくもりに思いを馳せ私はゆっくりと、言葉を紡ぐ。

「貴方が来てくれるのなら、大地に根を張る桜の大樹になるのもいい、かな…」

「桜…？」

私は見ていた青空からそっと視線を外し、銀様に向ける。

「私だという目印に、毒々しいほどの赤い花弁を身に纏うの…。きつと貴方は見つけてくれるわ」

くすりと、背中で笑う声。

「桜の花は淡い桃色と、それを艶やかに見せるような白だよ？」

「他の木と同じだと、私だって…わからないでしょう？」

「私は例え同じ花弁の色でも、桜を見つけるよ」

銀様は即答だった。すとんと、銀様の言葉は私の中に入ってくる。

「…ありがとうございます。嘘でも嬉しゅう御座います」

「もう、お眠り…桜」

銀様がそういつと同時に私は急な睡魔に襲われる。銀様が帰る頃決まって睡魔がやってくる。

この睡魔が私にはもどかしかった…。何か、大切なものがどこか遠くに行ってしまったような感覚で、もう、手にする事は叶わないような感じがして怖かった。

「…また、来世で会おう…私だけの桜…」

私が最後に見たのは銀様の悲しそうな瞳だった…。

暖かい…。あれ…お布団なんか…かけたっけ…？

この夢か現かのまどろみの中、目覚めないといけないのはわかっているのに、体が動かない。

「おはよう、桜。いいご身分ね？」

「あ、雪花様…？」

まどろみから揺り起こされ私は気がつく、また銀様の帰りを見送っていないのだと…。

「まったくあんたときたら…客の送りも出来ないのかい？」

「…申し訳ありません…」

ただ謝るしかなかった。1回や2回じゃない、あの人に買われたその日から今の今まで…送ったことなんてなかったから…。

「あの男があんたに大量に金を落としていかなかったら、あんた今頃これだよ？」

雪花様はおどけて首を刎ねる真似をし笑って見せた。

「それはそうと、朗報だよ桜」



朗報と言う雪花様の顔はあまり嬉しくなさそうにみえた。

「とあるお偉い様が方からのご指名で…手の空いている遊女はそ  
つちへつとお達しだ…」

悪いけど、簡単に荷造りして城へ向かってくれ」

「…わかりました」

「ああ、後これ。あんたの客からだ」

渡された紙は綺麗な字で綴られていた。

『愛しの桜へ』

暫くそちらへ赴くことが出来なくなりました。寂しくないよう  
に、この書を送る。

体に気をつけ健やかに過ごせるように…」。

『銀』

短い文。

それでもじわじわと暖かいものがこみ上げてくる。

「…大事にされてんだね。私が言うのもおかしな話したが、ここ  
は遊郭だ。

女が男を楽しませ満足させるためにだけに私らは存在する、男た  
ちだけの夢の歓楽街。

…女の私らに人権なんてありやしないのさ」

ぐさぐさと、わかっていた現実が突きつけられる。

「でもね、こんな場所だからこそ桜、あんたには笑っていて欲し  
い。

…こんな場所で言う台詞じゃないのは、重々わかってるよ。

だけどね桜、私はお前を我が子のように手塩に育ててきた。だからこそ、笑っていて欲しい。

遊郭なんて穢れた場所じゃなく貧しくとも、…一般市民であったならどれほどよかったであろうと…何度思ったかしのれないよ…。この話しは上からのご指名で断ることは出来ない…だからこそ不安なんだ…。

元気で、元気でまたここに帰って来ておくれ…約束だよ？」

抱きとめられる腕は銀様とはまた違う暖かさがあった。

「雪花様、私をこの年まで育てていただき本当に感謝しております。

だからこそ、雪花様への感謝と育てていただいた恩のためにも…桜はまたここに帰って参ります」

これは、本当の気持ち。

育ての母でもあり、遊郭での先輩でもある雪花様。

…私にとつてはかけがえの無い女性。だからこそ、私は出来る限りの笑顔で雪花様にたった一言。

「行つて参ります、母上様」

自分の中の不安と雪花様の不安を押しつけ笑顔で、私はこの身体に馴染みのある遊郭を後にした。

吉原の遊郭から遊女が50余名。丹波川を挟み、向山の鶏冠山に集められた。

遊女は誰一人として酌はせず、ただひたすらに詠えられたステーションで舞う事だけを強要された。

色とりどりの扇子が一樣に舞う姿は咲き乱れた花の如く美しく、一種の儂さをかもしだして…。

言い表すならば百花繚乱。

美しい言葉の一つに混じれているのは少しくすぐったく、それが誇りにすら思えていた。…一人前の遊女になれたんだ…と。

ここにある音は、三味線の音と武将たちの下卑た声で…静かなはずの山は今煩いくらいに人の声で溢れている。

舞が進むにつれ暗くなり、薄暗い蝋燭の炎と、篝火があたりを照らす以外は漆黒の闇。

闇の帳が下りる頃、舞も佳境へと入っていった。

何も言わず、なめるような視線で酒を飲んでいる男たちの視線をかいくぐり、私は遙か空の下に居る心休まる男性、銀様の事を想っていた。

今何をしているのか、少しでも私を想っていてくれるのか…。声を聞くことは出来ないけれど、姿を拝むこともできないけれどそれでも、私は想わずに居られないほど苦しかった。

逢いたい…。

どんな形でも、あの人に会いたかった。

なぜか判らない、だからこそなのかもしれない…今不安を感じているのは。

三味線の音が一瞬止み、不意に私の集中が途切れる。

舞を舞うという集中の鎖から一瞬放たれ、我に返った。遊女は皆次の舞に入っていくのを見て、私も慌ててソレに倣う。

扇子のように艶やかな色をした私たちの着物が、夜空を舞う蝶のように桜の木の下で咲き誇る。

だけど…。

舞っていた時は気がつけなかった。

…視界が少し傾いているような気がする？

しかし、私一人だけ舞を止めるわけにはいかず何事も無かったかのように、再び流れてきた三味線のリズムに合わせてさらに妖艶に淫靡に、蝶のように美しく花のように儂げに舞い続ける。

彼の人を想い、彼の人だけに恋慕の念を三味線のリズムに乗せて捧げる。

逢いたい…。

無事に帰ることが出来たなら伝えよう、自分の気持ち。  
ゆっくりとターンをし、正面を見据えたとき私は見てはいけないものを見てしまった気がする…。

闇に紛れるような黒い装束に、一瞬だけ光る細い閃光。…刃？

「あつ…。」

そう思った刹那。

視界が、ゆっくりとずれた。上から下へ…。

階段から落ちたときのように、見ていた場所がずれ行く。

助からない。

これは直感。

何が起きたのか理解した時、私の脳裏には大切な人達が浮かび去っていく。

そんな中で…私が最後に目にしたものは、汚いモノを見るかのようには眺めていた武将たちだった……。

……

……

……

…

『いたぞ！九尾の狐だ！！』

荒れ狂う炎に映し出されるのは、怒りと恐れに満ち溢れた人間たちの顔。

『村に被害が起きぬ今のうちに狩ってしまえ！』

村人たちの罵声を聞いていた。

『…桜、私が囷になるからお逃げ』

聞いたことのある、優しい声が小さく響く。

『いや……。……様を置いてなど、行けません』

『このままでは死んでしまうよ。……大丈夫、必ず見つけるから』

そういうと返事を待たず庇つかのように、村人の群れへ躍り出ていった。

その輪の中へ入りたかった。

でも、入れない。

入ることを許してはくれなかった。

必死で反対のほうへ、私とそっくりな女の方は逃げていく。

一瞬見た後ろ。

満足そうに笑む……銀様にそっくりな男性。切りつけられて、尚も、笑顔だった……。

走り、夜が明ける頃に女は桜の木の下で腰をついていた。

一人涙すると、とまらなかつた。

抱きとめてくれるあの人がいない……。

受け止めてくれるあの優しい腕がない……。

何故自分たちがこんなめにあわねばならぬのか？……そう自問自答するかのよう……。……。

けほつ。

赤い液体が、大地を艶やかに染め上げる。

『いたぞ!』

小さくけど、はっきりと聞こえる声。

赤い液体は、女の…血。

胸に刺さった矢は、ゆっくりと流れ衣ごと大地を鮮血で染め上げる。

槍で突かれた場所からは血吹雪をあげ、木を花弁をも大地と同じ色に染めていく…。

それを見た誇らしげな村人の顔、満足げに互いを褒め称える姿。

『九尾の狐を狩ったぞ、これで村は安泰だ!』

手を取り合い互いを称える言葉がゆっくりと音を落としていった

……。

…

……

……

……

不意に頭の中をよぎる映像。他人事なのに他人事じゃない映像。嗚呼、私。遙か昔、あの方と…銀様と共に出たのね…。

遊女とその客ではなく、恋人のように…。

崩れ行く意識の中私は切に願った。

銀様、お慕いしております…。

また、来世でお会いしたい。

ゆっくりと落ち逝く中、私は最も大切な人の笑顔を思い描いていた…。



## 千年乃戀（後書き）

活動報告にあるとおり、初話のこっちを設定ミスしたまま気がつかず  
に投稿してた；  
寝ぼけてた…といっことにしておく！

## 千年乃想

\* \* \*

口惜しい…

全てを私から奪った彼奴が憎い…

殺しても殺しても、殺したらぬ程に憎い…

私の希望、可愛い可愛い我子

其方だけが私の全て、其方の為なら私は

全てを、己が命をも捧げよう

\* \* \*

甘い香りが風に乗って、大地を駆け巡っている。

風はこの日を待っていたかのように人々に絡みつく。

その風の真つ只中、私は手にしている荷物が風に振り回されないようにしながらゆっくりと歩を進める。

春の、生命を感じる事の出来るこの季節はとても好き。様々な香

を運んできてくれる風も、明るいこの陽の光も、”春”そのものが私は大好き。だけど、今日は一段と風が強い気がする。

館内に入り慣れた廊下を歩き比較的直ぐ、【一縷いちろう 礫れき】と名の刻まれたネームプレートが目に入る。

「教授、桜です。…入りますよ〜?」

宣言どおりに扉を開けると、初老の人物がいる。

「おお、桜君。レポートと頼んでおいた書類はどーなったかね?」

どーみても、窓辺で日向ぼっこをしてるようにしか見えないが、これでも教授。そう、たとえ机の上にお茶と饅頭しかなく、室内を見渡しても何を専攻しているのか不明でも、だ。

「ありますよ。こっちが頼まれていた書類で、その下がレポートです」

「ご苦労であつた。お礼に饅頭と茶をご馳走しよう」

にこやかに笑みで勧める教授に対し私は思わず引きつってしまつた。

お饅頭は美味しいし、けど、問題なのはお茶のほう。

ペットボトルとかに入っている緑茶ではなく、限りなく抹茶。しかも濃い。何かの罰ゲームか茶道の嗜みがなければ、あんな濃いもの口に来ません…。

「いえ、今日はこの後予定がありますのでお気持ちだけで結構ですよ」

「まあまあ、少し位なら時間取れるじゃろ？そこに座ってなさい」  
まるつきり、近所のおじいちゃんが孫に向かって話す口調。教授とその生徒には見えない…。

私は半ば諦めて勧められた椅子に腰掛け、抹茶を手にする。

…苦い…

しょっぱい物と一緒に白米を食べると『ご飯がすすむ』という現象が起きるけど、これはお饅頭がすすむ…というより、お饅頭の甘さで口の中を浄化しないと抹茶が飲めない！

ああ、なんて罰ゲーム…。

ひっそり泣しながら抹茶をすすり、渡した書類を読みふける教授を恨めしげに眺めていた。

ぱらぱらっと、紙をめくる音に、何かをしきりに書くペンのカリッという独特の軽い音だけが室内を満たしている。

机にかじりつき、何かの作業をしている教授の背中を見るのは嫌じゃなく、むしろどこか懐かしささえ覚える錯覚に陥るのはきつと、教授が教授らしくないから。

…抹茶はやっぱり嫌だけど…せめてもう少し薄いとか、緑茶にしてほしい、ペットボトルの。

私がここに来て、いったいどのくらい経っただろう？

軽いノックで私は我に帰る。

「教授、失礼します」

入ってきたのは男性。

「おうおう、男は帰れ。私の部屋に入っているのは若い女子だけじゃ」

「…教授、その台詞とても誤解されますよ？」

教授とのやり取りもいつもの事なのか、大して気にしているふうもなく室内に入ってくる。

「あの、初めまして！…「じつえき」煌奕 「ウツクダ」桜と言います」

私は慌てて自己紹介をする。

「「じつえき」…？珍しい苗字だね」

「お前も名乗ったらどうだ？女性に名乗らせて己が名乗らないのは礼儀に反するぞ」

…緊張している…。何故か分からないけれど、緊張している。

「そうですね。僕は如月きんづきと言います。こんな教授の助手をしているんです」

「目上の者に向かって”これ”とはなんじゃ…。最近の若いもんは馴ながなっておらんのだ」

「そういう台詞は、やるべき事をやった上で言うてくださいな？  
尻拭しりぬぎいをさせられてる僕の身にもなつて欲しいですね、一縷いちろう”  
教授”？」

見事な漫才コンビ。教授とその助手とも思えないくらい、息があつている。

「桜君、用事があつたんじゃないかね？レポートには問題が無い、この調子で取り組んでおくれ」

ごほんつと、わざとらしい咳をする教授に笑みを絶やさないう月助手。何時までもこの2人を見ていたい気持ちに駆られるけど、私は静かに席を立つ。

「お茶とお饅頭まんじゅうご馳走様でした教授。如月助手も、私はこれで失礼しますね」

ぺこりと軽く会釈をし、私は独特の雰囲気のあるあの室内を…館内を出る頃には風は凪なぎぎのようになっていて、館内へ行く前の風が信じられないくらいだった。

「さーくーらー！」

「お待たせ、今日はどこへ寄ろうか？」

親友の明るい声と元気に私は振り回されつつも、いつもの帰り道を2人で歩いていく。

\*\*\*\*\*

「…明るい良い子でしたね」

「そうじゃな…。ぶれる事無くまっすぐに成長しておる」

静かな室内に、仄かに香る甘い香りとお茶の香り。

「生前も、この茶を一生懸命飲んでおったなあ…わざと濃く苦くしてあるこの茶を」

「…そういえばそうですね、初めて出された時も頑張って飲み干してました」

室内の窓からは桜が見える。これから親友と思われる生徒と家路に着くのであろう。

「ワシや秋姫の事なら気にせんでええ。お主はお主の道をいけ」

桜をみやる礫の目は、愛情に満ち溢れていた。

「いいえ、生前初めて彼女を見たときに好きになりました…。これは僕が好きで歩んできた道です」

「…そうか。ワシに出来ることは殆ど無いが、悔いの無いように今生を生きるとええ」

遅しく頼れると共に、小さく見える背中。

「…あいつはもう、物の怪に成り下がっておる。引導を渡してやってくれ」

「はい。桜を傷つけようとするものは、誰であっても許さない…」

「お前こそ、一族の次期長に相応しい…考え直さぬか？」

浮かぶのは明るく笑い、風のようにそよぐ彼女の姿。

「お断りします。既に破門された身です…その役は金締きんじ兄さんにお任せします」

それだけ言うと、ここには用はないとばかりに部屋を出て行く。残されたのは抹茶と饅頭の残り香と…、先程とは違って変わって貫禄のある表情をした初老の男性の姿。

「親子揃って茨の道か…。ワシが秋姫に出会わなったら、違った道になっていたんだらうか？」

自問自答するも、出るはずの無い答えに白黒をつけたがっている。その答えを出すのは自分ではない、自分の息子なのだから…。

「銀締ぎんじ…、秋姫…、桜…すまない」



小さな謝罪は、誰に聞き留まる事無く虚空へと消えていった……。

\*\*\*\*\*

あれから、数日。

館内で何かと教授の助手である如月さんと出会う機会が増えた。

教授の研究室だけでなく、廊下や図書館、構内の要所要所で以前より顔を会わせる回数が増え、最初の頃よりも親近感を感じるようになった。

話すのは日常的な会話から、今後のレポートやその課題…多岐にわたり彼の知識・教養の深さにただただ、感心するばかりである。

そして、今日。

『この後暇になってしまったので、ショッピングに付き合ってくれませんか？』っという如月さんのお誘いに、私は承諾することにした。…私も午後から講義も何も無く暇を持て余していたから。

いつもならいる親友も、今日に限ってレポートを大量に仕上げなくてはならなくなったそうで、親友がいたらきつと断ってただろうなあとも思う。

でも。

あれ？彼女、何を専攻してたっけ？親友なのはわかるけど、いつ、どこで、出会ったんだっけ？

少しずつ、少しずつだけど記憶が混乱していく。

如月さんも、あれだけ整った容姿なら少なからず女性陣から話題になりそうなのに、聞いたことが無い気がする。

そもそも、一縷教授の講義…私受けたことあったっけ？

私の母の名は、雪花。…あれ？苗字、煌奕…は今の苗字だけど、旧苗字は？

優しく微笑む母の姿。いつも私を包んでくれて安心させてくれる母。

何かが、おかしい気がする。

ぐるぐるの頭の中で考えていると不意にぽんつと、肩に何かが触れる。

「お待たせしました、桜さん」

いつもと変わらない笑みで、私を迎えに来てくれたのは如月さんその人。

「いいえ？今来た所です、待つというほど待ってません」

男性は基本的に女性よりも背丈が高い。私は自分より背丈のある人を見上げる経験が少なく、とても新鮮な感じで如月さんを見ていた。

「どうしたんですか？」

いつまでも見上げていることを不思議に思ったのかな？柔らかな笑みを湛えたまま見つめ返される。

「男性と並んで歩くつというシチュエーション初めてだから、ついつい男性の背の高さに驚いてしまって…ごめんなさい、失礼でしたね」

頬が熱いのはきつと気のせい。私は慌てて俯いて必死に誤魔化す。

「気にしてませんよ？僕も女性と並んで歩くのは初めてです…母以外では、ね？」

優しい嘘に感じる言葉。けれど、その言葉は何故か私には真実に聞こえた。それと同時に、胸の奥に渦巻く感情が”嬉しい”と悲鳴を上げている。

「鼻肩にしているお店があるんです、話しながらいきましょうか」

当然のようにエスコートされる私。

当然のようにエスコートしてくる如月さん。

なんでだろう？

安心もできるし、これが当たり前のような…不思議な錯覚。

「如月さん、さぞかし女性に人気があるでしょうね？何故今まで、女生徒から如月さんの話題が聞けなかったのか不思議です」

茶目っ気なんて私には無いけど、私はふとした疑問を本人に聞いてみる。

「そう、ですか？結構教授は人使いが荒いですから、構内で過ごす時間はとても少ないんですよ」

「でも、最近は私と話す機会多いですよね？」

如月さんは少し困ったようににはにかみ、『内緒ですよ？』と前振りをしてから教えてくれた。

「教授は抹茶が好物なんですよ。抹茶のアイスクリームやクッキーにプリン…そういうったお茶菓子を土産にして、なんとか誤魔化してるんです」

なんだか、容易に想像が出来てしまう。きっと用意されたお茶菓子を机の上に並べて、どれから食べようか？とか、何時食べようか？とか、研究をそっちのけで夢中になっている教授の姿を…。

「確かに、お茶菓子在夢中になりそうですね？」

「ですから、桜さんと僕のヒミツですよ？ばれちゃつと他の学生もきつと同じ事しちゃいますから」

「はい、私と如月さんの秘密ですね？」

なんだか嬉しい。小さな事でも、彼を何かを共有できる喜びで溢れている。

「…っと、ここですよ。一度桜さんを連れて来たかったお店です」

指し示された建物は古風で、洋風で溢れかえっている町並みからすればとても時代遅れに見えた。

からんつと、乾いた音をたてるウィンドチャイム。店内を見れば古風な理由が直ぐに分かる。

「おいでやすませ、如月はん。お待ちしておりました」

「例の物は出来ていますか？」

「ええ、出来ておりますよ。早速試着致しはりますか？」

「是非お願い致します」

呉服を頼んでいたのかしら？どれも見ているだけで楽しくなる。私は店内に展示されている呉服の数々を眺めては楽しんでいた。まるで万華鏡みたいで、見るだけで満足してしまった。

「…桜さん？」

「？」

私は呼ばれた理由が分からず、思わず首をかしげる。

「桜さんに着て欲しい着物があるんです。…着て見てもらっても良いでしょうか？」

「私…ですか？」

「ほんで問答しても仕方おまへんよ？ささ、早速着付けますから来て下さいな」

やや強引な店員さんに引きずられるように、私は奥へ引つ張り込まれていく。

「如月はん、奥へ来いで下さいね？使用中ですから」

店員さんに何故か注意される如月さん。

「大丈夫ですよ？ちゃんと弁えていますから」

いつもの笑みを絶やさずに軽く手を挙げ『いつてらっしやい』っ  
と見送る。どうしたら良いか分からないけど、とりあえず愛想笑いをし、そのまま店員さんに成すがままにされていった…。

「桜花…ですか。桜さんのイメージに合いますね」

「ええ、ほんまに。ここまでイメージ通りに着こなせる人はそうそう居ませんよ」

淡いピンクをベースにした着物。白の上に淡いピンクを重ね着したのを『桜花』と呼ぶらしい。

「…この色合いは素敵ですね…なんだか落ち着きます」

私が着替えお披露目する頃には、いつの間にか如月さんも着替え

ていた。いつもの洋風な格好から古風な格好…教科書にでてくるような昔の『和』の衣装。

「如月はんも、よう似合っております」

「衣冠と言つんですよ、桜さん？」

ゆっくりと歩み寄る如月さん。なんか、洋服もそうだけど和服も絵になっていて私は少し悔しかった。

私はそんなに似合っていないのに…、やっぱり悔しいけど見とれてしまう。

「とても、お似合いですよ？その格好で大学に着たら、さぞかし教授が喜びそうですね」

「それは、お互い様です」

私の目の前までゆっくり歩み寄ると不意に、私の視界が足元から上へを向けられる。

「…やっと、会えました…」

私の顎に軽く手をかけ覗き込む如月さん。

「じっと…してるんだよ？」

言われるままに動かずにいれば何かが刺さる。

「かんざし簪ですよ」

まだ、私の顔を覗き込む如月さんを私も見つめる。…ううん、ちがう。思考が停止していて何も出来ない、考え付かないだけかもしれない。

「初めて貴方を見たときからずっと、恋焦がれていました」

まだ動かない思考回路。その意味をゆっくりと理解するように、私は彼の言葉を聞き次の言葉を待つ。

「僕だけの貴方でいてくれませんか？」

囁くように、その言葉は私にしか聞かせないという感じで小さく呟き聞かせる。

その言葉の意味をちゃんと理解した時、私は思わずはっとした。

「…だめ…でしょうか？」

次の言葉を急かすように、彼は再び囁く。

私は言葉を紡ぐ変わりに小さく頷いてみせた。

甘い甘美な誘惑にも似た彼の囁きに、私は自分でも頬が火照っているのが分かる。

くすくすと、彼は小さく笑うともう一回囁いた。

「僕の事、ちゃんと名前で呼んでくださいね？」

如月さんの…名前？



自己紹介の時は苗字しか名乗らなかつた彼。普通ならば知る良しもない、けど。

混乱した記憶の中にある臆の中にいる男性のシルエットが、とても彼に似ているという事。

その男性のこと確か…こう呼んでいた気がする…。

「銀様…」

私は無くしたものをやっと見つけられたかのように、もう二度と無くさないようにと言わんばかりに彼…、私の最愛の人銀様に縋りついた…。

千年乃想（後書き）

連続投稿ごめんなさい；

万が一こっちをちらみしてくれた方いたらごめんなさい；

しっかりつなげました、もうこんなミスしません；

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5067z/>

---

千年乃戀

2011年12月17日02時55分発行